



TV Animation Series

V O L U M E T W O

*Engage Kiss*

©BCE / Project Engage



TV Animation Series Engage Kiss 2

「あ、そういえばさー、元気にしてる？ 年下の元カレ」  
「ひゃうっ!?」

「確か今でも仕事で会ったよね？もしかして今回の頼み事も、実は彼絡み？」  
「なんでそんなどうでもいいこと覚えてるのよ!?」

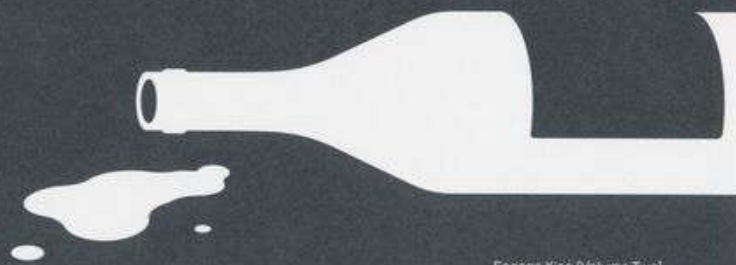
「そりゃ、のろけも愚痴も泣き言もくまなく聞かされた身としてはねー」  
「な、な……」

「初めて聞いた時は驚いたよ。あのお堅いアヤノが、実はショタだったなんてさー」  
「人聞きの悪いこと言わないでよ！」



# 3 years ago 丸戸史明

Engage Kiss (Volume Two)  
Special novel by Fumiaki Maruto



……なんて会話が繰り返られる、まさにその三年前。

「あー、いらつしやーい、凛花。ま、適当なトコ座つてー」

「いやちよつと待てアヤノ。これ人を呼んでいい部屋か？」

エントランスとエレベーターの二度のセキュリティを通過し、ようやく最上階の部屋のドアをくぐった蜂須賀凛花が見たのは、それだけの高級タワーマンションの一室とは到底思えないほどの、散らかりまくったリビングの惨状だった。

床全体をビールの空き缶が覆い、テーブルの周囲をワインの空き瓶が取り囲み、そしてテーブルの上にはおびただしい数のウイスキーやジンのボトル……

どうやらこの部屋の主、夕桐アヤノは、進むに従いどんどんアルコール度数が高くなっていく最悪の飲みちらかし方をしていらしい。

しかも……

「お前、何も食わずに飲んでるな!」

それら大量の酒類容器の中に、食べ物の容器が何一つ含まれていないことが、凛花の危機感をさらに煽るこ  
とになった。

「あー、えーと、それはほらー、ダイエット中だしー」

「アルコールのカロリーがどれだけあるか知ってる!」

「えーと、えーと……そ、そう、私がしてるのは糖質制限でー、だから蒸留酒ならオッケー……」

「酒クズの言い訳やめんかー ほら、もう飲むなー」  
「あー、返し……うぶ」

と、凛花が親友の手にある酒瓶を取り上げると、アヤノは、いつもの凛とした所作とは程遠いのろろした動作でそれを取り返そうとして失敗し、テーブルに突っ伏した。

「どうしちゃったんだよアヤノ? 久しぶりに部屋に呼んでくれたかと思えばこの惨状……そもそも彼氏は?」

さらにテーブルに突っ伏したまま、一瞬だけびくんと体を震わせる。

「一緒に……っ、い、い、いあ……っ」

「え？ え？ あれ？ アヤノ……？」

「う、うえつ、うえええええええー！」

「あのね、あのね、凜花、ひつ、いつ、いああ……っ」

「お、おい、ちよつと……」

「シュウが、シュウが……出てつちやつたああああー！ この部屋とてころか、シテイからいなくなつちやつたああああああー！」

そしてふたたびテーブルに手をついて顔を上げると、涙まみれの顔を露花に晒し、その胸に飛び込んでいった。

✖

✖

✖

「ほら、水」

「ありがとう……」

凜花がアヤノの部屋を訪れてから三〇分後……

ようやく泣き止み、落ち着きを見せたアヤノに、凛花は優しい笑顔を向け……

「じゃ、お昼だよ」

「ちよつとお帰らないでよく！」

そして足は玄関に向けようとしたところを素早く引き止められた。

「え、だってさあ、ここで残つても聞かされるの泣き言とか愚痴だけじゃん？」

「もちろん！ だってそのために呼んだんだし」

「そこまで自信満々に断言されるといつそ清々しいな」

「聞いてくれるよね？ 親友でしょ？」

「ああそうだ、親友だ……今まで彼氏を紹介してくれなかったくらいには親しかったよなあたしたち？」

「それは……」

「確かに散々のろい話は聞かされたよ。でもアヤノお前、彼氏の写真見せてくれたりとか、何やつてる男か教えてくれたりとかはなかったよな? ただ、たまに“シュウ”って名前を口にするくらいでさ」

「だからそれは、仕方ないのよ……」

「あくそうだな仕方ないな。ハイスクール三年間ずっと同じクラスで、二人合わせたら文武両道の最強コンビとして君臨し続けた程度の関係じゃ、教える訳にはいかないよな」

「藥花」

ちなみにどっちが文でどっちが武だったのかは今さら説明しない。

「だから、と言う訳であたしじゃ役不足……じゃなかった役者不足ということぞ」

「彼の名前は、緒方シュウ……」

「元……」

「緒方イサムの子だって言えば、あなたにはわかるでしょ？……そして、私とその名前を隠してた理由も」

そう、現市長、蜂須賀正隆の娘……というより、前市長、蜂須賀義輝の孫である凛花には、その、緒方イサムという名に確かな心当たりがあつた。

十二年前の、ハイヴスリー・オルゴニウム採掘場における大規模悪魔災害。いや、世間的には謎の爆発事故の当事者として、政府関係者には忘れられない、そして一般市民には忘れていて欲しい名となっていたのだから。

「シユウはね、子供の頃から、敵しかいなかった……」

「そ、そっか……」



「適当な捏造情報に乗っかって、ただ一人生き残った当事者の家族を叩くマスコミ。その報道を鵜呑みにして、子供たちの間に無視やいじめの構図を作る親たち……そして、その全ての元凶となった、悪魔に対しての隠蔽と嘘を繰り返すシティ政府……」

「い、いやあ、大変だったね」

「だから私が、私だけは、シユウの安らげる場所になってあげられたら……あの事件で彼が心に傷を負ってから、ずっとそう思ってた……」

「やべーこれ朝までかかるぞ」

「シユウと私の距離が近づくようになったきっかけは、彼のミドルスクール入学の頃だった……」

「へえ、結構古い付き合いなんだね」

「何言ってるの。最初に出逢ったのはもともと昔、シユウの家族がシティに越してきた頃だからもう十五年以上になるわよ。そんじょそこの自称幼なじみとはレベルが違う、いわばシユウとの付き合いが生涯で一番長いのはこの私だと言っても過言ではない、そんな長く深い縁なのよ」

「うわあ……」

「彼は、ミドルスクールに入ると同時に、ウチに来て、母さんに弟子入りした……」

「ウチって、AAA？ その年で？」

「私も母さんも反対したんだけどね。幼過ぎるって。でもシユウは、聞く耳持たなくて」

「そっか、確かにそりゃ過酷な……いや、待てよ？」

「何よ凛花？ あなたシユウに同情の余地がないと言っても言うつもり？ 言っておくけど彼を追い詰めたのは……」

「いや、彼氏のことじゃなくてさ……確かアヤノ、お前がAAAの訓練受け始めたの、ハイスクールに入学した直後くらいだったよな？」

「そうね、凛花と知り合った時にはもう……」

「彼氏って、確かあたしたちの三つ下だったよな？」

「……それが何か？」

「も一ついいかな？」

「駄目」

「いやいや語るに落ちたでしょ！ お前、そのコがAAA入ったから後追ったんだな？ ないでしょそれ！ 命張る仕事だよ！ 男目当てで飛び込んだの？ それもう理由が女子高生レベルだよ！」

「女子高生時代に決断したんだから何も間違っていないでしょ！」

「ヤバイよアヤノ。お前シヨタ丸出しだよ。ていうか肉食系すぎんだろ青田買いだよ！」

「田んぼの米食べてるなら肉食じゃないでしょ適当なこと言わないでよ！」

と、凛花のあまりに強烈過ぎるツツコミに激したアヤノではあったけれど……

それでも彼女は、自分がシヨタであることを巧妙に否定しなかった。

「そして、それから●年……私とシユウは、身も心も結ばれた」

「その伏字に正しい数字入れるなよ絶対入れるなよ？」

「学業と訓練の両立は厳しかったけど、シユウと一緒に耐えられた」

「おかげであたしとは遊んでくれなくなったけどな」

「凛花だって家族の仕事手伝うようになって、全然連絡取れなくなっただけに」

「あつは……でも、ま、お互い大変な時期だったよな」

「そうね、大変だった……特に、AAAの訓練は、私にとって地獄だった」

「ま、相手が悪魔なんだし、そんなくらいの覚悟がないと……」

「特に最悪だったのは、鍛えれば鍛えるほど体型が変わっていくこと。おかげで脚ふつとくなっちゃったし！」

「え？ 一番大変なのそこ？」

「で、でもっ、でもシユウはね？ 『鍛え上げられたアヤノさんも綺麗だよ』って……だ、だから私、どんなに辛い訓練でも、耐えられて……」

「アヤノお前、本当に脳だけは乙女だな。体はゴ……いやなんでもない。続けて」  
 「でもシユウは、学校にもろくに行かず、私なんかよりずっと訓練にのめり込んで、どんどん強くなっていった」  
 「アヤノに弱っちいところ見せたくなかったんじゃないの？ 可愛いところあるじゃん」  
 「……ちよっと凛花あんた人の男に可愛いかコナかけるようなこと言うのルール違反でしょ？ だいたい写真さえ見せたことないのにに想像でモノ言ってるのよ笑わせるわ。あんたにシユウの何がわかるっていうのよ」

「せっかく褒めてやったのにめんどくさいなあもう！」

「そして彼は、私や母さんの説得にも耳を貸さず、ハイスクールを中退してA A Aの仕事に専念するようになった」

「……もうあたしはその決断を肯定も否定もしないぞ」

「まあ、中卒扱いだから、私より初任給低かったんだけどね」

「急に世知辛い話になった！」

「私はその後も、大学とA A Aを両立してたから、シユウとの実力差は開くばかりだった……彼は朝から晩まで悪魔退治に没頭し、たった二年で隊長にまでなった。それこそA A A始まって以来の出世頭だったのよ」

「けど、いくら強くても、前線に勇敢に戦ってるだけじゃ……」

「そう、それはただの悪魔殺し。恐れられこそすれ、悪魔災害そのものの抑止に繋がってる訳じゃない」

「A A Aや、他の業者がどれだけ悪魔を潰しても、むしろ十二年前と比べて悪魔災害の発生頻度は上がってる……それは警察庁の調査結果を見てもハッキリしてる」

「それだったら、やみくもに駆除するだけでなく、悪魔災害のメカニズムを研究し、そもそもの悪魔発生を元から断つように、人と組織を動かしていくべき……」

「あんたの母親、夕桐アキノがそうしてるようにね……って、あれ？ 待てよ？」

と、凛花はこの時点でようやく、アヤノが語ろうとしていた「真実」が何なのか、おぼろげに気づき始めて

いた。

「もしかして、お前の彼氏がシティを出ていったのって……」

「……そう、この街の悪魔を、根絶やしにするため、だって」

「最初にそれに気づいたのは、ちよっとした喧嘩からだだった」

テーブルに置かれた二つのショットグラスに、凛花が琥珀色の液体を注ぐ。

「シユウが夜中にうなされて、うわ言で『カンナ、カンナ』って、他の女の名前を呟き出して……私は悲しくて腹が立って、彼を叩き起こして泣き叫んで……」

うち一つのグラスを手にとると、アヤノはぐっと、想いを呑み込むように、その喉を焼く液体を一瞬で空にした。

「あ、アヤノな？ 手遅れだけど、そういうの男をドン引きさせるだけだからな？」

「けど後になって気づいたの……カンナっていうのは、あの事故で亡くなった、彼の最愛の妹の名前だって」

「しかも冤罪とか最悪に最悪重ねてんじゃない……」

続いて凛花も、こちらは目の前の面倒ごとを忘れようとしているかのように、同じくグラスを一気に傾ける。  
 「でも、それでわかったの……シユウが、まだ十二年前を引きずっているってこと。引きずり過ぎているってこと」

「そ……っか」

アヤノの嘆きの言葉を、凛花は多分、彼女の期待するのとは違う感慨で受け止めていた。

十二年前の事件が起こった時、凛花はまだ一〇歳そこそこだった。

しかしその事件直後に、祖父、義輝が放った、冷徹な声に乗せられた言葉は、はっきりと覚えている。

『緒方イサムが、ゲートに蓋をした。』



ほんのしばらく、奴を抑え込んでくれたのだ。  
私たちは、彼の作ってくれた猶子を無駄にしてはならない。  
それは、彼を稀代の愚か者と世間に思わせてでも、  
果たさなくてはならない。事業。なのだ」

それは祖父が、当時副市長であった父、正隆に……ではなく、当時ハイスクールの学生だった、正隆の娘にして凛花の姉である莎花に言い聞かせていたはずの言葉だった。

「私との生活は、彼にとって永住の場所じゃなかった。心の底から、安らげる場所じゃなかった……っ」

「あのさ、アヤノ……」

「何よう」

「彼のその行動はさ、別にアヤノを捨てたってことにはならないんじゃない？」

ならば、悪魔撲滅に対しての能力も思い入れも特筆するほどに高い、緒方シュウという人物の今回の行動は。その、「事業」にとって、一つの大きな前進となり得るのでは……？

「部屋から出ていったのに？ 何度止めても、聞き入れてくれなかったのに？」

「だから、彼にはそれよりも大事なことが……」

「それって私との未来よりも家族との過去を選んだってことでしょ？ やっぱり捨てられたってことになるじゃない……ひううう……っ」

「あゝもうっ、わかった、わかった！ だからほら泣くな！」

……とはいえ、未だ若くて政治経験の少ない凛花には、シティの利益と親友の幸せを天秤にかけることができる程、冷静な判断ができるはずもなく。

「まずはちょっと頭を冷やして冷静になろうよ？ 男なんて山ほどいるんだからさあ。特にアヤノ、お前みたいないい女には」

だから結局、事実を並べて理性的に説得するより、感情に訴えて沈黙化する方向にしか舵を切れなくて。

「駄目よそんなの、シュウより好きになれそうな男なんて、金輪際現れそうにないもん」

「どこが好きなの？ 能力あっても稼ぎ少なくて女に養われてるような男だろ？」

「目で好きになったのと、過酷な境遇にもかかわらず頑張って生きてることと、顔が好みだったことと、笑顔が素敵なことと、時々見せる真剣な表情がカッコ良かったりすることと、なのに私にだけ見せる、ちよっと落ち込んだ仕草とか、寂しそうな憂い顔がたまないことと……」

「あゝわかったわかった、ごめんもういい」

「それにそれに、彼の匂いも好きっ！ 子供の頃のミルクみたいな甘い香りも、今のタバコ臭さも大好きっ！ 出逢った時に好きになった子供の私を褒めてあげたいっ！」

「ていうか彼が出てったのってアヤノのその重さのせいじゃないの？」

けれどその、あまりに濃密過ぎる、泣き言に見せかけた懺悔を浴び続け、すぐにその方向に舵を切ったことを後悔した。

「悪魔との戦いには、決して妥協しなかった。いつも最前線に立って、ボロボロになって……なのに、どれだけ傷ついても、私にはいつも笑ってくれてっ」

「あゝ、そうかい、そりゃ良かったな」

「本当に、本当に優しかった……騙してたのかもしれないけど、私のこと愛してるって言うてくれてた！」

「えゝと、つまり……愛してもいたし、騙してもいたんじゃないの？」

「だったらずっと騙し通して欲しかった！ すっからかんになるまで私を吸い尽くしてくれればよかった！ ただ側にいて、私のお金で幸せに暮らしてくれればよかったっ」

「やべーよお前……」

理論的にも経験的にも、男女の事情には疎い凛花ではあったけれど……

それでも彼らが、どっちもキマリ過ぎてて素人が手を出してはいけない類の関係であることだけはわかった。わかりたくもなかったけれど。



「何よ、  
醸花……」

テーブルの上には、濃花が来た時よりも更に大量のボトルが積み上がり、二人の酔いも眠気もそろそろ頂点に達しようとしているようだった。

「それを聞くな、帰ってくる可能性はないのか？　でしょ？」

「待つ気があるかないかじゃない。どうせこっちにはそれしかできないのよ」

だつて凛花が何を言おうが、最初から彼女の気持ちは一ミリたりとも動くことはなく、だから彼女のこれらの行動指針も、何一つ変わることはないということなのだから。

人

「……ん」

本当なら、選択肢は無限にある。

正確には、「待たない」という選択肢を選んだ時、その次に示される選択肢は多分、とても明るい傾向のものが無限に存在するのだろう。

「帰ってこなければ、意味がない」

「私にとっては、どっちでもいい」

けれど彼女は、その選択を選ばない。

それどころか、そっち方面に流れそうなフラグを全て潰して回っている。

自分が、多分、今まで以上に哀しい思いをするとわかってて……

「ならアヤノ、あたしはもう、何も言わない」

正確には、言つても仕方がない。

「ただ最後に一つ……再会したら、泣くより、笑ってあげなよ？　その方が、彼も救われると思うからさ」

「努力、する……っ」

あまりに諦めが悪く、人の説法を何も聞かないお釈迦様には、これくらいしか伝えることがないから。

「ぶえええええええええええん！」

まあ、それでも からかつたらすぐ泣くお釈迦様には、これくらいの意地悪くらいしても罰は当たらないだろうとも思っていた。